

## 小学5・6年生の食意識・食行動と自己意識との関係性

A survey study based on the fifth and sixth grades of elementary school pupils about relationship between self-consciousness and meal consciousness with their behaviors

上原 正子<sup>\*1</sup> 松原 愛香<sup>\*1</sup> 大場 和美<sup>\*1</sup> 加藤 象二郎<sup>\*2</sup>

※1 愛知みずほ大学短期大学部 ※2 愛知みずほ大学

Masako Uehara, Aika Matubara, Kazumi Ohba, Zojiro Katoh

\*1 Aichi Mizuho Junior College \*2 Aichi Mizuho College

It was surveyed to clear the gender differences among the upper grades of elementary school pupils whom have public and private self-consciousness by usage of Self-Consciousness Scale for School Pupils. And it was also performed to clear the relationships between meal consciousness with their behaviors and private self-consciousness. A relatively high relationship among meal consciousness, eating behaviors, and mental development of pupils was obtained as a main result. Especially, survey items which had higher relations with the mental and emotional developments were the first consideration to meals and school lunch, pleasant feelings and light-hearted greetings to meals. From this survey, suggestive result obtained that affluent mental development in school pupils need dietary education, that is, "Shokuiku".

Keyword Super shokuiku school Self-consciousness Elementary school pupils

### I はじめに

平成26年度、文部科学省は「スーパー食育スクール事業」<sup>\*1</sup>を立ち上げた。背景として、① 栄養教諭の配置は都道府県により差があること、② 食育の指導体制に地域で差があること、③ 食育に取り組んだ成果を科学的に検証する必要があることを挙げている。また事業の目的は、子どもたちの「食事の重要性の理解」「生活習慣の改善」「食品を選択する能力の習得」「食に関する感謝の心の醸成」「社会性の習得」「食文化の理解」につながる食育のモデル実践プログラムの構築と示している。

小中学校における「食育」は、学習指導要領の改訂<sup>\*2</sup>（平成20年3月27日）から始まったといえる。総則に「学校における食育の推進」が盛り込まれ、関連する教科には「食育」が明記された。同時に、食育を担う新たな教育職として「栄養教諭」<sup>\*3</sup>が創設された（平成17年4月1日）。現在、栄養教諭は全国に5,356名<sup>\*4</sup>が配置されているものの、公立小学校20,558校、中学校9,707校<sup>\*5</sup>においては十分とはいえない状況にある。

これまで国では、食生活学習教材の作成<sup>\*6</sup>（平成21年3月）、学校給食法の改正<sup>\*7</sup>（平成21年4月1日施行）、「食に関する指導の手引」の改訂<sup>\*8</sup>（平成22年3

月）等により、学校における食育のための指導体制の整備を図ってきた。さらに運用面では、「栄養教諭を中核とした食育推進事業」<sup>\*9</sup>による実践事例やその成果により、食育の充実を図ってきた。

スーパー食育スクール事業は、学校における食育の定着をより一層図るため、市町村や学校が大学や企業、生産者、関係機関等と連携し、食育を通じた学力向上、健康増進、地産地消の推進、食文化理解など食育の多角的効果について科学的データに基づいて検証を行うことを期待したものであり、教育としての食育の可能性を数値で示す新たな試みである<sup>\*1</sup>。

本学は西尾市教育委員会からの依頼を受けて、平成27年度研究指定校である西尾市立福地南部小学校<sup>\*10</sup>（以下、「研究指定校」）における各学年の研究結果について、データ処理・分析を行った。

筆者らは櫻井茂男の「児童用自己意識尺度」<sup>\*11</sup>を用い、高学年のデータ処理・分析を行った。

「児童用自己意識尺度」は、子どもの自己意識の個人差を測定するために作成された尺度であり、公的自己意識と私的自己意識から構成されている。注意を向けるのが自己の外面かそれとも内面かにより違いがある。

私的自己意識については、櫻井ら<sup>\*11</sup>は、「自分の内面

に注目できるようになってくる頃であり、そうできる児童のほうが自己意識が発達しており自分をよく認識できるため、そうでない児童よりも対人不安傾向が低く、自己顕示欲求（よい意味で、自己主張）が強く、孤独感はそのほどなく、自分に自信をもって行動していること（コンピテンス）が示唆されている」と述べており、児童の私的自己意識の傾向は、精神的・発達的な指標、適応の指標として用いることが可能であると提案している。

先に筆者らが行った「児童用自己意識尺度」を用いた研究<sup>※12</sup>では、① 先行研究と比べ、公的自己意識は男女とも大きな差が認められたものの、私的自己意識に差はみられなかった、② 公的自己意識と私的自己意識とも男女間に差があった、③ 共食の頻度の違いにより、私的自己意識得点に差が認められ、食事と自己意識の間に関係性があることが示唆された、などの結果が得られている。

そこで本研究では、高学年児童を対象として「児童用自己意識尺度」を活用した調査を行い、公的自己意識・私的自己意識に学年間、性別による差がみられるかどうかについて検証し、さらに、食意識や食行動が私的自己意識と関係性があるかどうかについて検証することとした。

## II 方法

### 1 対象者と調査方法

スーパー食育スクール事業を実施するにあたり、研究指定校を研究介入校とし、同西尾市内にある M 小学校を非研究介入校とした。

対象者は研究介入校及び非研究介入校の 5・6 年生、251 人とし、本事業の開始時である 7 月と 5 か月経過した 11 月に実施した。いずれも登校時の朝の会の時間に自記式質問紙用紙を配布し、記入後すぐに回収した。

### 2 調査内容

#### (1) 個人属性

児童の個人属性として、学年、年齢、性別、家族数、兄弟姉妹数を記入させた。

#### (2) 家庭の食事

設問は食行動の 7 問と食意識の 2 問とした。

食行動は「朝ごはんを食べますか」「朝ごはんは家族一緒に食べますか」「朝起きて、朝ごはんを食べる前はお腹がすいていますか」「夕食は、家族一緒に食べますか」「食事中にテレビをみますか」「家庭での食事の調理や準備・片づけなどの手伝いをしますか」「食事の前後にあいさつをしますか」の設問に、「いつも食べる」「1 週間に 4 日以上」「1 週間に 1~3 日くらい」「いつも食べない」等の頻度や、「いつもする」「だいたにする」「しないことが多い」「しない」等の程度からなる 4 つの選択肢を用意した。

「しないことが多い」「しない」等の程度からなる 4 つの選択肢を用意した。

食意識は「食事の時間は楽しいですか」「食事は健康に過ごすために大切だと思いますか」の 2 問とした。

なお、留意点として、「朝ごはん」はご飯だけでなくパンも含まれること、「家族一緒」には「家族全員」か「家族の誰かと一緒」という複数の人をいうことを書き添えた。

#### (3) 学校給食

食行動として、「給食は残さず食べていますか」を設問とし、「残さず食べる」「あまり残さない」「残すことが多い」「いつも残す」の 4 つの選択肢を設けた。

食意識は「給食の時間は楽しいですか」「給食を残さず食べることは大切なことだと思いますか」「給食に嫌いなものがでてきても食べる自信はありますか」の 3 問とした。回答は「かなりある」「まあまあできると思う」「あまり自信がない」「まったく自信がない」に「わからない」を入れて 5 選択肢とした。

#### (4) 自己意識

公的自己意識は「おとなが自分のことをどう思っているか気になる」「髪形や服装に気を使う」「人が見ていると自分をよく見せようとする」「自分のうわさが気になる」「みんなの前で何かする時自分の動作やかっこうが気になる」「何かしている時、みんなが自分のことをみているような気がする」「自分が他の人にどう思われているか気になる」「はじめて会った人にはなるべく自分の良いところばかり見せようとする」「賛成、反対を決める時、手を挙げている人が多い方に自分もてをあげてしまう」の 9 問であり、自分の外面（服装や髪形）や他者に言動などに注意を向けやすい傾向にあるかを判断する。私的自己意識は「今、自分がどんな気持ちなのか考えることがある」「自分のしたことや言ったことを後から反省して見ることもある」「ほかの人を見るように、自分のことを考えてみることもある」「自分の気持ちがかわると、すぐに自分で気が付く」「自分が本当にしたいことは何だろうと考える」「自分のことをじっくり考える」「自分の考えをはっきりさせておきたい」「みんなと考えが違って『自分はぜったいこう思う』ということがある」「自分が正しいと思ったことはやりとげる」「ものごとはあまりじっくり考えない」の 10 問であり、自己の内面や感情や気分に関心する傾向を判断する。

公的自己意識及び私的自己意識は、回答選択肢の 4 段階を 1~4 までの得点として単純集計し、回答者それぞれの公的自己意識得点、私的自己意識得点とした。

### 3 解析方法

分散分析 (js-STAR 2012) を用いた。また、家庭の食事及び給食に関する質問項目と私的自己意識との関係性を、統計ソフト SPSS Ver.23 を用いて検定を行った。

### Ⅲ 結果

#### 1 公的自己意識と私的自己意識の得点

研究介入校と非研究介入校を併せて学年・性別に解析した結果、公的自己意識得点は、5年生男子 16.61、女子 20.58、6年生男子は 18.99、女子は 22.72 となった（表 1、図 1）。また、私的自己意識得点は 5年生男子 24.88、女子 25.32、となり、6年生は男子 27.54、女子 28.46 となった（表 2・図 2）。

公的自己意識について、学年と性別を要因とする 2 要因分散分析の結果は、学年（5年生と 6年生）の間に 1%水準（ $F(1,247)=11.57, P<.01$ ）、性別（男女）の間に 1%水準（ $F(1,247)=33.72, P<.01$ ）でそれぞれ有意差がみとめられた。また 2つの要因間に交互作用はなかった。

私的自己意識については、学年（5年生と 6年生）の間に 1%水準（ $F(1,247)=16.51, P<.01$ ）で有意差がみとめられたものの、性別（男女）の間には有意差はみとめられなかった。

表 1 公的自己意識得点の結果 (n=251)

学年	性別	平均得点	標準偏差
5年生	男(n=56)	16.61	4.73
	女(n=60)	20.58	5.00
6年生	男(n=70)	18.99	5.67
	女(n=65)	22.72	5.25

表 2 私的自己意識得点の結果 (n=251)

学年	性別	平均得点	標準偏差
5年生	男(n=56)	24.88	6.51
	女(n=60)	25.32	5.55
6年生	男(n=70)	27.54	5.40
	女(n=65)	28.46	4.98

また、研究介入校、非研究介入校別に集計した結果は、2校とも公的自己意識の男女に差がみとめられたが（表 3、4）、2校間の差はみとめられなかった（表 5）。

表 3 研究介入校の自己意識得点(7月調査)

	公的自己意識		私的自己意識			
	平均	標準偏差	平均	標準偏差		
5年生	男子	16.43	4.61	24.28	7.37	] ns
	女子	20.33	5.01	24.29	6.48	
	全体	18.43	5.20	24.29	6.95	
6年生	男子	19.40	5.31	28.54	5.71	] ns
	女子	23.50	5.39	28.21	5.43	
	全体	21.76	5.72	28.35	5.55	

+ p<0.10 \* p<0.05 \*\* p<0.01

表 4 非研究介入校の自己意識得点(7月調査)

	公的自己意識		私的自己意識			
	平均	標準偏差	平均	標準偏差		
5年生	男子	16.74	4.87	25.43	5.75	] ns
	女子	20.75	4.99	26.03	4.78	
	全体	18.90	5.32	25.75	5.26	
6年生	男子	18.68	5.89	27.02	5.27	] ns
	女子	21.87	4.96	28.52	4.38	
	全体	20.00	5.74	27.64	4.97	

+ p<0.10 \* p<0.05 \*\* p<0.01

表 5 研究介入校と非研究介入校の比較(7月調査)

	公的自己意識		私的自己意識			
	平均	標準偏差	平均	標準偏差		
5年生	研究介入校	18.43	5.20	24.29	6.95	] ns
	非研究介入校	18.78	5.36	25.70	5.33	
6年生	研究介入校	21.76	5.72	28.35	5.55	] +
	非研究介入校	20.01	5.82	27.64	4.97	

また、7月と 11月の自己意識得点の比較では、公的自己意識得点が 5年生は 18.43 から 18.57 に、6年生は 21.26 から 22.80 となり、やや高くなったものの、t 検定による群間に差はみられなかった（表 6）。私的自己意識得点は 5年生が 24.29 から 24.71 とやや高くなり、6年生は 28.35 から 27.81 とやや低くなった。

表 6 研究介入校における 7月と 11月の得点比較

		公的自己意識		私的自己意識		
		平均	標準偏差	平均	標準偏差	
5年生	7月	18.43	5.20	24.29	6.95	] ns
	11月	18.57	5.75	24.71	7.17	
6年生	7月	21.76	5.72	28.35	5.55	] ns
	11月	22.80	5.21	27.81	6.07	

研究介入校における公的自己意識の 11月の得点は 7月より 5年生男子がやや高くなり、女子が低くなった。6年生は男女とも高くなり、より強く有意差がみとめられた。非研究介入校の得点は、5年生男女及び 6年生女子が低くなった（表 7）。

研究介入校の 5年生の私的自己意識得点は男女ともやや高い得点となったものの、研究介入校 6年生及び非研究介入校の 5・6年生全てが 7月より低い結果であった。

表7 公的自己意識得点及び私的自己意識得点の学校・学年・性別一覧

			公的自己意識		私的自己意識		
			平均	標準偏差	平均	標準偏差	
5年生	研究 介入校	男子	7月	16.43	4.61	24.28	7.37
		男子	11月	17.08	6.25	24.36	7.17
		女子	7月	20.33	5.01	24.29	6.48
		女子	11月	19.92	4.66	25.08	7.15
	非研究 介入校	男子	7月	16.74	4.87	25.43	5.75
		男子	11月	15.83	5.11	24.93	5.07
		女子	7月	20.75	4.99	26.03	4.78
		女子	11月	20.20	4.82	24.86	5.05
6年生	研究 介入校	男子	7月	19.40	5.31	28.54	5.71
		男子	11月	20.68	5.53	27.68	6.69
		女子	7月	23.50	5.39	28.21	5.43
		女子	11月	24.35	4.34	28.09	5.56
	非研究 介入校	男子	7月	16.68	5.89	27.02	5.27
		男子	11月	18.71	5.18	26.80	5.60
		女子	7月	21.87	4.96	28.52	4.38
		女子	11月	20.97	5.43	27.16	3.94

## 2 食行動や食意識と私的自己意識の関係性

食行動や食意識に関する質問項目の単純集計の結果は表8-1, 8-2のとおりである。

食行動では、朝食を家族(大人)と一緒に食べていない日がある児童は55%、夕食は30%、食事中テレビを「いつも見る」あるいは「見る方が多い」児童は63%であった。また、食事の手伝いを「いつもする」あるいは「だいたいする」は、男子27.8%、女子47.2%となり20%近くの差がみられた。

食意識では、食事を「とても楽しい」と答えた児童は39%であり、男女の差は男子が34.1%、女子が44%であった。また「食事の大切さ」は「とても思う」が78.9%と高いものの、その一方で「食事の楽しさ」は39%であった。

この結果をもとに、回答群を2群に集計し、群別に私的自己意識得点の平均を求め、t検定による群間差を求めた(表9)。

有意差がみとめられた項目は、食行動の「食事前後のあいさつ」を「いつもする」群(27.41)とその他の群(25.14)、食意識の「食事の楽しさ」が「とても楽しい」群(27.92)とその他の群(25.77)、「食事の大切さ」の「とても思う」群(27.22)とその他の群(24.53)、「給食の大切さ」の「とても思う」群(27.16)とその他群(24.82)であった。

また、食行動の「食事中のテレビ視聴頻度」は「見ない・見ない方が多い」群(27.81)と「見る方が多い・見る」群(25.95)、「食事の手伝い頻度」の「いつも手伝う・手伝う方が多い」群(27.68)と「手伝う時もある・手伝わない」群(25.99)、食意識の「給食で嫌いなものを食べる自信」の「とてもある」群(27.83)とその他の群(26.16)でも有意差が認められた。

## IV 考察

人間にとって食べることは、個体の生命を維持するために不可欠な行為だけでなく、心理的、社会的な意味をもつ。食と心理的、社会的との関連性の研究からはさまざまな結果が得られている。

例えば、食事と心理および行動パターンの研究<sup>13</sup>では、食事の場面での「よい思い出」は「家族」「話す」や「自分」「ペース」などとの関連がみられたり、「よくない思い出」は「マナー」「寂しい」「一人」との結びつきがみられたりしている。食事とQOLの研究<sup>14</sup>では、夕食の共食頻度が高い者のうち自発的コミュニケーションが多い群と少ない群では「毎日の楽しさ」「食事の楽しさ」「主観的健康感」に有意な群間差がみられている。また、学校給食の社会心理学的研究<sup>15</sup>では、「相互協調性自己観の内面化の過程と、学校給食への認知や態度が形成される過程との間に、複雑な関係があること」が示唆されている。そして保育士への質問紙調査<sup>16</sup>では、幼児期の給食が「こどもの仲間関係を育む時間になっている」「非常に思う」52.8%と捉えている研究がある。

本研究は子どもの自己意識の発達の視点から精神的・発達の指標の現状を捉えるとともに、食行動や食意識との関連性を調べたものである。

自己意識に関する本調査結果と先行研究<sup>11</sup>の比較では、公的自己意識に関して5・6年生ともかなり低い得点となっている(参考1)。筆者が行った研究<sup>12</sup>でも同様な結果が得られており、近年の子どもの傾向と捉えることができる。公的自己意識は自己の外側(服装や髪形)や他者に対する言動などに注意を向けやすい傾向のことだけでなく、社会不安と密接な関係にあることが指摘されている。本研究の結果からは、「みんなのうわさが気になる」「自分がどう思われているか気になる」のような子どもの姿が見えてくる。さらに、学年別、男女別に群間差がみとめられたことから、女子よりも男子に、5年生よりも6年生にその傾向が強いことが分かってきた。また、研究介入校と非研究介入校の比較では差が見られなかったことから、年齢・性別による児童の傾向として捉えることができる。

一方、私的自己意識の性別・学年進行による量的変化には有意差は認められなかったものの、女子の方が高く、学年進行によって高い結果となることがわかってきた。このことは自己意識だけでなく他の認知的側面からも同様な結果が得られており<sup>17</sup>子どもの発達として妥当な得点が得られたものと推察できる。また、先行研究の得点よりも高い結果であったことは私的自己意識が精神的・発達の指標であることから、子どもの心の発達が子どもを取り巻く社会、教育、家庭、環境等のさまざまな要因により変化してきているとも考えられる。

7月と11月の公的自己意識の比較では研究前後に群間

差がみられたものの、非研究介入校においても同様な差がみられたことから、スーパー食育スクール事業による変容とは捉え難い。また私的自己意識は研究前後に変容はなく、5年生男子を除き、得点が一様に下がった。その原因を結果から考察することはできず調査の限界であると考えられる。

食行動や食意識と私的自己意識の関連性では多くの関連が示唆された。家庭の食事や給食をととても大切に思う子どもが70～80%あり、「大切」という意識が高いことに気づく。5・6年生は、「食事は大切」「食事の前後にあいさつをする」「給食は残さず食べる」等について、家庭や学校の様々な場面で学習してきている。その学習により、より良い食事の態度が理解でき、日常の食事の場で望ましい行動ができる子どもたちが、情緒的・発達的に高い得点となったと考えられる。食事の時間が子どもたちにとって情緒的・発達の要因になっていることが示唆された。

本研究の今後の課題として、「食事の楽しさ」の更なる検証の必要性があげられる。「食事の楽しさ」は「とても楽しい」群とその他の群において私的自己意識に有意に差があることがみとめられた。「とても楽しい」群は情緒的・発達的に高いと考えられることから、スーパー食育スクール事業の研究前後で「食事の楽しさ」に変容はあったのか、あったとすれば変容はどのような食育によって生まれたのか等について検証することにより、食育と子ども発達との関連性を明らかにすることができると考えられる。

また、筆者が行った研究<sup>※12</sup>では家庭での共食頻度と自己意識の発達との間に関連があることが示唆されているが、本研究の結果では顕著に表れなかった。共食の頻度と子どもの発達、先行研究<sup>※18・19</sup>から幼児期の心の発達に関連が深いとも考えられる。家庭での親と子の「共食」についての在り様を把握できる指標を開発し、様々な角度から共食の必要性を啓発していくことが必要である。

参考 1 先行研究の自己意識得点(櫻井、1992)

	5年生				6年生			
	男子(n=107)		女子(n=110)		男子(n=97)		女子(n=110)	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
公的自己意識	26.14	7.04	29.21	6.33	22.43	6.76	28.36	6.32
私的自己意識	24.28	5.43	23.96	5.31	22.98	4.89	25.79	4.91

参考 2 公的自己意識と私的自己意識の得点(上原 2014)

	5年生			
	男子(n=600)		女子(n=626)	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
公的自己意識	18.35	5.69	21.72	5.47
私的自己意識	23.95	5.78	25.32	5.42

V 結論

食行動や食意識と子どもの心の発達は有意な関連性がみられた。特に子どもに情緒的・発達の指標が高かった項目は、食事と給食の大切さを思うところ、食事の楽しさを感じる、食事の前後に挨拶をすること、であった。心を育てる食育の事業実践の何が有意に働いたかは検証できなかったものの、子どもたちの豊かな心の発達には積極的な食育活動と高い関連性のあることが示唆された。

本研究は、スーパー食育スクール事業の一環として行われました。本研究の調査実施にあたり、協力いただきました西尾市教育委員会、西尾市立福地南部小学校、調査に回答いただいた児童の皆様様に深謝申し上げます。なお、本研究にあたり、開示すべき COI 状態はありません。

参考文献

- 1 文部科学省 スーパー食育スクール事業について [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/26/04/1346607.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/04/1346607.htm)
- 2 文部科学省 現行学習指導要領(本文、解説、資料等) [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/newcs/youryou/1356249.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/newcs/youryou/1356249.htm)
- 3 文部科学省 学校教育法等の一部を改正する法律の概要 [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/eiyou/04111101/007.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/eiyou/04111101/007.htm)
- 4 文部科学省 平成 17～27 年度の栄養教諭の配置状況(平成 27 年 4 月 1 日現在) [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/sports/syokuiku/\\_icsFiles/fieldfile/2015/07/02/1257966\\_0.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/syokuiku/_icsFiles/fieldfile/2015/07/02/1257966_0.pdf)
- 5 文部科学省 文部科学統計要覧(平成 27 年版) [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/toukei/002/002b/1356065.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/002/002b/1356065.htm)
- 6 文部科学省 食生活学習教材(中学生用)(平成 21 年 3 月) [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/eiyou/1288146.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/eiyou/1288146.htm)
- 食生活学習教材(小学校高学年用) [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/eiyou/06050810/001.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/eiyou/06050810/001.pdf)
- 食生活学習教材(小学校中学年用) <http://www.syokuken.jp/student/20090409b.pdf>
- 7 文部科学省 学校給食法の改正 <http://law.e-gov.go.jp/htmldata/S29/S29HO160.html>

- 8 文部科学省 食に関する指導の手引ー第1次改訂版  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/sports/syokuiku/1292952.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/syokuiku/1292952.htm)
- 9 文部科学省 栄養教諭を中核とした食育推進事業  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/sports/syokuiku/1340539.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/syokuiku/1340539.htm)
- 10 文部科学省 平成27年度スーパー食育スクール指定一覧表  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/27/04/\\_icsFiles/afieldfile/2015/04/14/1356759\\_01.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/27/04/_icsFiles/afieldfile/2015/04/14/1356759_01.pdf)
- 11 堀洋道監修 櫻井茂男・松井豊編 心理測定尺度集IV サイエンス社 2007 12-17
- 12 上原正子 大場和美 加藤象二郎 小学5年生の家庭での共食頻度と自己意識の発達との関連性 愛知みずほ大学紀要 第8
- 13 飯塚由美 「共食」と「一人食」における心理および行動パターンの分析I 島根県立大学短期大学部松江キャンパス研究紀要 2014;Vol.52 21-29
- 14 衛藤久美 武見ゆかり 中西明美 足立己幸 小学5年生の児童における家族との共食頻度及び食事の自発的コミュニケーションと食態度、食行動、QOLとの関連 日健教誌 2012;20(3) 192-206
- 15 高田利武 交流給食と文化的自己観:学校給食の社会心理学的研究 社会心理学研究 2008;第24巻第2号 140-163
- 16 今津屋直子 日浦直美 幼児期の食育と共食時の人間関係(1) 教育学論究 2013;第5号 39-46
- 17 村上達也 西村多久磨 櫻井茂男 小中学校における共感性と向社会的行動および攻撃行動の関連:子ども用認知・感情共感性尺度の信頼性・妥当性の検討 発達心理学研究 2014;第25巻第4号 399-411
- 18 瀬尾知子 榊原洋一 幼児期の共食の意味理解ー幼児は共食をどのように捉えているのかー 日本食育学会誌 2014 第8巻第1号 3-8
- 19 白木裕子 幼児の朝食内容と生活リズムおよび保護者の共食との関連 チャイルド・サイエンス 2013;第3号 48-52

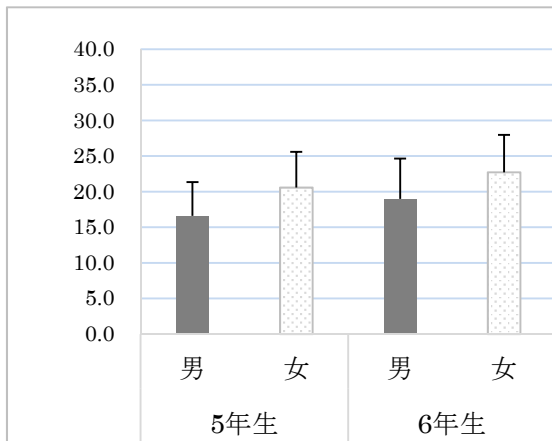


图1 性別・学年別公的自己意識平均得点

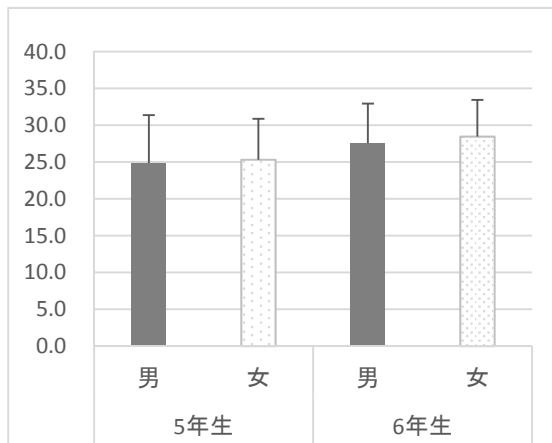


图2 性別・学年別私的自己意識平均得点

表8-1 家庭の食事の食行動・食意識に関する調査結果 学年別・男女別 (n = 251)

	全体				学年別				男女別			
	n (人)		%		5年生		6年生		男子		女子	
	n (人)	%	n (人)	%	n (人)	%	n (人)	%	n (人)	%	n (人)	%
朝食の共食頻度	113	45.0	55	47.4	58	43.0	51	40.5	62	49.6		
いつも	41	16.3	18	15.5	23	17.0	24	19.0	17	13.6		
週4日以上	65	25.9	29	25.0	36	26.7	31	24.6	34	27.2		
週に1~3日	32	12.7	14	12.1	18	13.3	20	15.9	12	9.6		
ひとり	65	26.0	24	20.7	41	30.6	33	26.2	32	25.8		
朝食前の空腹	141	56.4	66	56.9	75	56.0	76	60.3	65	52.4		
いつも	44	17.6	26	22.4	18	13.4	17	13.5	27	21.8		
半々	173	69.2	82	70.7	91	67.9	83	65.9	90	72.6		
空腹でない	48	19.2	23	19.8	25	18.7	27	21.4	21	16.9		
夕食の共食頻度	28	11.2	11	9.5	17	12.7	15	11.9	13	10.5		
いつも	1	0.4	0	0.0	1	0.7	1	0.8	0	0.0		
週4日以上	48	19.1	21	18.1	27	20.0	22	17.5	26	20.8		
週に1~3日	45	17.9	23	19.8	22	16.3	27	21.4	18	14.4		
ひとり	84	33.5	38	32.8	46	34.1	44	34.9	40	32.0		
食事中のテレビ視聴頻度	74	29.5	34	29.3	40	29.6	33	26.2	41	32.8		
見ない	46	18.3	24	20.7	22	16.3	17	13.5	29	23.2		
見ない方が多い	48	19.1	25	21.6	23	17.0	18	14.3	30	24.0		
見る方が多い	128	51.0	57	49.1	71	52.6	70	55.6	58	46.4		
見る	29	11.6	10	8.6	19	14.1	21	16.7	8	6.4		
食事の手伝い頻度	165	65.7	73	62.9	92	68.1	79	62.7	86	68.8		
いつもする	54	21.5	23	19.8	31	23.0	29	23.0	25	20.0		
手伝うことが多い	18	7.2	10	8.6	8	5.9	8	6.3	10	8.0		
手伝う時もある	14	5.6	10	8.6	4	3.0	10	7.9	4	3.2		
手伝わない	98	39.0	46	39.7	52	38.5	43	34.1	55	44.0		
食事前後のあいさつ	132	52.6	59	50.9	73	54.1	68	54.0	64	51.2		
いつもする	18	7.2	10	8.6	8	5.9	14	11.1	4	3.2		
だいたいでする	3	1.2	1	0.9	2	1.5	1	0.8	2	1.6		
しないことが多い	198	78.9	94	81.0	104	77.0	90	71.4	108	86.4		
しない	40	15.9	18	15.5	22	16.3	27	21.4	13	10.4		
食事の楽しさ	4	1.6	1	0.9	3	2.2	3	2.4	1	0.8		
とても楽しい	3	1.2	1	0.9	2	1.5	2	1.6	1	0.8		
まあまあ楽しい	6	2.4	2	1.7	4	3.0	4	3.2	2	1.6		
あまり楽しい	98	39.0	46	39.7	52	38.5	43	34.1	55	44.0		
全然楽しくない	132	52.6	59	50.9	73	54.1	68	54.0	64	51.2		
食事の大切さ	18	7.2	10	8.6	8	5.9	14	11.1	4	3.2		
とても思う	3	1.2	1	0.9	2	1.5	1	0.8	2	1.6		
まあまあ思う	198	78.9	94	81.0	104	77.0	90	71.4	108	86.4		
あまり思わない	40	15.9	18	15.5	22	16.3	27	21.4	13	10.4		
思わない	4	1.6	1	0.9	3	2.2	3	2.4	1	0.8		
分からない	3	1.2	1	0.9	2	1.5	2	1.6	1	0.8		
分からない	6	2.4	2	1.7	4	3.0	4	3.2	2	1.6		



表8-2 学校給食の食行動・食意識に関する調査結果 学年別・男女別 (n = 251)

	全体		学年別		男女別		
	n (人)	%	5年生	6年生	男子	女子	
	n (人)	%	n (人)	n (人)	n (人)	n (人)	
食 行 動	給食を残さず食べるか	181	72.1	70	111	99	82
	残さず食べる	36	14.3	21	15	14	22
	あまり残さない	31	12.4	24	7	12	19
	残すことがある	3	1.2	1	2	1	2
			0.9	1.5	0.8	1.6	
食 意 識	給食の楽しさ	154	61.4	66	88	82	72
	とても楽しい	78	31.1	40	38	34	44
	まあまあ楽しい	13	5.2	9	4	7	6
	あまり楽しくない	6	2.4	1	5	3	3
	全然楽しくない						
	給食の大切さ	195	77.7	88	107	95	100
	とても思う	50	19.9	24	26	27	23
	まあまあ思う	2	0.8	1	1	1	1
	あまり思わない	1	0.4	1	0	1	0
	思わない	3	1.2	2	1	2	1
分らない							
給食での嫌いなものを食べる自信	72	28.7	32	40	45	27	
かなりある	104	41.4	44	60	49	55	
まあまあある	54	21.5	27	27	23	31	
あまりない	16	6.4	9	7	8	8	
まったくない	5	2.0	4	1	1	4	
分らない							
			3.4	0.7	6.3	0.8	3.2

表9 頻度別・意識別にみた私的自己意識得点

	全体				男子				女子			
	n (人)	平均	S.D.	n (人)	平均	S.D.	n (人)	平均	S.D.	n (人)	平均	S.D.
朝食共食	153	27.00	5.95	75	27.25	6.05	79	26.77	5.85	79	26.77	5.85
週4日以上	98	26.16	5.53	51	25.10	6.02	46	27.33	4.66	46	27.33	4.66
週3日以下												
朝食前の空腹	65	27.79	6.07	33	27.65	6.24	32	27.94	5.89	32	27.94	5.89
いつも	186	26.24	5.70	93	25.92	6.03	93	26.53	5.32	93	26.53	5.32
いつでもではない												
夕食共食	173	26.75	5.59	82	26.63	5.52	91	26.85	5.65	91	26.85	5.65
いつも	78	26.33	6.30	44	25.91	7.11	34	26.88	5.01	34	26.88	5.01
週6日以下												
食事中のテレビ視聴頻度	93	27.81	5.82	49	27.08	5.78	44	28.63	5.76	44	28.63	5.76
見ない、見ない方が多い	158	25.95	5.71	77	25.92	6.30	81	25.98	5.09	81	25.98	5.09
見る方が多い、見る												
食事の手伝い頻度	94	27.68	5.67	35	27.71	5.68	59	27.66	5.66	59	27.66	5.66
いつも、手伝うことが多い	157	25.99	5.82	91	25.84	6.22	66	26.20	5.22	66	26.20	5.22
手伝う時もある、手伝わない												
食事前後のあいさつ	165	27.41	5.68	79	26.37	6.02	86	28.38	5.15	86	28.38	5.15
いつも	86	25.14	5.81	47	26.38	6.31	39	23.72	4.80	39	23.72	4.80
いつもではない												
給食の残食量	181	26.98	5.73	99	26.99	6.03	82	26.96	5.33	82	26.96	5.33
全部食べる	70	25.77	5.97	27	24.08	5.94	43	26.79	5.75	43	26.79	5.75
残すことがある												
食事の楽しさ	98	27.92	5.69	44	27.38	5.56	54	28.34	5.76	54	28.34	5.76
とても楽しい	153	25.77	5.73	82	25.74	6.30	71	25.81	5.00	71	25.81	5.00
それ以外												
食事の大切さ	198	27.22	5.64	90	26.92	5.94	108	27.46	5.37	108	27.46	5.37
とても思う	53	24.53	5.99	36	25.06	6.38	17	23.41	4.90	17	23.41	4.90
それ以外												
給食の楽しさ	154	26.99	5.75	83	26.81	5.94	71	27.20	5.52	71	27.20	5.52
とても楽しい	97	26.08	5.89	43	25.56	6.38	54	26.51	5.41	54	26.51	5.41
それ以外												
給食の大切さ	195	27.16	5.75	96	26.83	6.08	99	27.48	5.39	99	27.48	5.39
とても思う	56	24.82	5.71	30	24.97	6.05	26	24.64	5.25	26	24.64	5.25
それ以外												
嫌いなものを食べる自信	72	27.83	5.73	44	27.35	6.07	28	28.59	5.04	28	28.59	5.04
とてもある	179	26.16	5.79	82	25.85	6.10	97	26.43	5.51	97	26.43	5.51
それ以外												

+p<0.10 \*p<0.05 \*\*p<0.01